

有關動名詞與變格動詞「suru」結合之考察

黃鴻信^{*}

摘要

日語裏具有動詞性質的名詞（即動名詞）與變格動詞「suru」結合時，有「動名詞＋suru」和「動名詞＋o＋suru」兩種表現形式，一般皆認為這兩種表現形式在語意的表達上並沒有特別不同，欲當名詞使用則以「動名詞＋o＋suru」表達，而欲當動詞使用則以「動名詞＋suru」表達。或許是此一認知的緣故，有關這兩種表達形式在使用上的差異方面的考察研究其實並不多。本研究的主要目的，即在於考察「動名詞＋suru」和「動名詞＋o＋suru」這兩種表達形式的差異。在這為數不多的既有研究裏，主要都是把重點放在意志性或 aspect 的特性方面，但是，意志性或 aspect 的特性固然分別有它們可以適用的規則性，仍然侷限於一些層面而已，並不具有一般性。本研究考察的結果，發現：（1）動名詞所表現的意涵只要是某一事象，當動作主體需要處理該事象時，不論該事象是屬外在的或屬心理、感情等內在層面的，也不論該事象是表示持續性的動作或是結果的完了，並且也不論該事象是屬於動作主體的意志性所得以控制與否，都可以採取「動名詞＋o＋suru」的表達形式；（2）隨著場合不同，動名詞所包含的名詞性質優先顯現，亦即動作主體有必要處理該事象時，應使用「動名詞＋o＋suru」的表達形式。相反的，當所包含的動詞性質被要求顯現時，亦即表達的重點是在該動作的發動、實踐時，必須採用「動名詞＋suru」的表達形式；（3）「動名詞＋o＋suru」的動作主體必須為以

^{*} 國立台灣大學日本語文學系副教授

人（包括擬人化之情況）為代表的有生物，而動作主體為無生物時，則相對的應採用「動名詞＋suru」的表達形式；(4) 動名詞的前面伴隨著連體修飾句，而整體構成一個事象時，應使用「動名詞＋o＋suru」的表達形式；(5) 句中已含有受格或表空間的移動、或途經的助詞「o」時，應使用「動名詞＋suru」的表達形式。

關鍵詞：事象、動作、動詞性質、名詞性質

A Study on the Combinations of Verbal Nouns and the Irregular Verb “Suru”

HUANG Hung-hsin *

Abstract

In Japanese, there are two forms of expression to combine verbal nouns and the irregular verb “suru”, “verbal nouns +suru” and “verbal nouns +o+suru”. These two forms of expression are considered almost the same in their meanings. Only that the form of “verbal nouns +o+suru” is used as nouns, while the form of “verbal nouns +suru” is used as verbs. Maybe this is the reason why the studies on their differences are so rare. And the purpose of this paper is to survey the differences between these two forms of expression.

Our findings are as follows:

1. If the connotation of verbal nouns is some state of affairs, and when the subject of action has to face that situation by chance, then we could use the form of “verbal nouns +o+suru”.
2. On the occasions when the nature of nouns in the verbal nouns reveals itself, we should use the form of “verbal nouns +o+suru”. But on the occasions when the nature of verbs in the verbal nouns reveals itself, we should use the form of “verbal nouns +suru”.

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

3. The subject of “verbal nouns +o+suru” has to be living things like human beings, while the subject of “verbal nouns +suru” has to be inanimate objects.
4. If a verbal noun accompanies an attributive adjunct, and the whole phrase forms some state of affairs, we should use the form of “verbal nouns +o+suru”. If there is an auxiliary word “o” in the sentence already, then we use the form of “verbal nouns +suru”.

Key words: state of affairs, chance, the nature of verbs, the nature of nouns

「VN をする」と「VN する」についての一考察

黄鴻信 *

要旨

「VN」には名詞的性質と動詞的性質の両方が含まれているゆえ、名詞として働く場合には「VN をする」が用いられるが、動詞として機能する場合には「VN する」で表現される。また、「VN をする」構文と「VN する」構文は、一般には意味的に何ら変わりがないと言われるが、この両形式の相違についての先行研究は、あまり多くないように思われる。本研究の目的はすなわちこの両形式の使い分けについて究明することにある。

これまでの関連研究では論述の焦点が動作主体の意志性またはアスペクト特性に置かれているように見受けられる。たしかに動作主体の意志性あるいは述語動詞はアスペクト特性と関連構文との間には一定の相関性があるが、一方、一般性を欠いているというのも事実である。本研究で考察した結果、主な発見として次のようなことが挙げられる。(1)「VN をする」構文が成り立つためには、「VN」が一つの出来事として存在しなければならない。この表現形式には動作主体がある出来事を実行に移すという特徴が潜在しているゆえ、「VN」が一つの出来事として認められさえすれば、その「VN」が顕在的な出来事か、それとも感情、心理という内面的抽象的な出来事かを問わず、また、継続動作を表すものか、完了結果を表すものか、あるいは動作主体の意志的制御がきくか否かに関わらず、「VN をする」構文が可能である。(2) 文脈から言えば、「VN」の名詞的性質が優先される、すなわち出来事への対処に焦点が置かれている

* 台湾大学日本語文学系副教授

場合には、「VN をする」構文で表現されるべきであるのに対して、「VN」の動詞的性質の遂行が要求される、すなわち動作の発動、表出に焦点が絞られている場合には「VN する」構文をとるべきである。(3) 動作主体が人間(擬人化の場合を含む)である場合は、「VN をする」構文を用いることが可能であるが、人間でない場合は「VN する」構文を使うべきである。(4) 「VN」が連体修飾節に従える場合には、「～VN をする」構文をとるべきである。(5) 文中にすでに目的格、または空間の移動、経過を表す「を」が含まれている場合には「VN する」として表現されるべきである。

キーワード：事象、動作、動詞的性質、名詞的性質

「VN をする」と「VN する」についての一考察

黄鴻信

1. はじめに

動詞的性質を有する名詞（以下VNと称す）が目的格助詞「ヲ」を介してサ変動詞「スル」を従える場合（以下「VNをする」と略す）とその直後に「スル」が起こる場合（以下「VNする」と略す）は、次に挙げる例文（1）～（5）のそれぞれにおける「御伴をする」・「御伴する」、「散歩をする」・「散歩する」、「学問をする」・「学問する」、「寝がえりをする」・「寝がえりする」のように「ヲ」が介在していようといまいと、意味的に同義であるかのようにみなされている。動詞的性質を有する名詞といえども、もとより名詞であるゆえ、それを一つの事態として扱う場合「ヲ」を介して「スル」を後続させるのが当然である一方、動詞的性質という因子をも内包しているゆえ、動詞として働くために直接「スル」と結合するのも自明の理である。そのためか、この二つの形式の使い分けについての研究はあまり多くなされていないように見受けられる。しかし、実際に検討してみると、例文（6）～（9）のように、（6）と（8）それぞれにおける「恋する」と「手術する」は、各々の表現に「を」を導入させて「彼女を恋をする」、「患者を手術をする」にすると、同一の文の中での目的格「を」の重複は許されないという構文上の制約により、非文とみなされるし、あるいは「彼女」、「患者」を所有格にして「彼女の恋をする」、「患者の手術をする」¹と書き換えると、意味的に紛らわしい不自然な文となるので、やはり非文と言わざるを得ない。一方、（7）の「恋をしている」と（9）の「手術をして」の「を」を取り除いても文としては成り立ちはするが、文のニュアンスが変わると思われる。また、例文（10）～（13）のように、そ

¹ 「彼女に恋をする」、「患者に手術をする」のように「の」格を使わずに、「に」格を使うと自然な分になることにも注意されたい。

れぞれ「蓄積（＊を）して」、「命中（＊を）する」、「形成（＊を）された・克服（＊を）しよう」、「一蹴（＊を）した」ともとより「VNをする」形式をとらない場合も見受けられる。これは、いうなれば、「VNをする」の使用にはなんらかの制約があるということを物語っていると考えられる。本研究の目的はこの「VNをする」の使用上の制約、すなわち「VNする」と「VNをする」の使い分けについて究明することにある。

なお、例えば「びっくりする」、「しっかりする」、「あっさりする」といった副詞に「スル」が結合して派生したサ変複合動詞、または「がたがたする」、「きょろきょろする」、「じたばたする」といったオノマトペ表現に「スル」が接続して派生したサ変複合動詞の場合はその間に「を」の介入が考えられないので、考察の範囲から外すことにする。

- (1) 「今度御墓参りにいらっしゃる時に**御伴を**しても宜ござんすか。私は先生と一所に彼所いらが**散歩して**見たい」「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」「しかし序に**散歩を**なすったら丁度いいじゃありませんか」

(漱石『こころ』)

- (2) 先生の宅へ帰るには私の下宿のつい傍を通るのが順路であった。私は其の所まで来て、曲がり角で別れるのが先生に済まない様な気がした。「序に御宅の前まで**御伴しまし**ょうか」と云った。

(漱石『こころ』)

- (3) 「子供に**学問をさせる**のも、好し悪しだね。折角修業をさせると、その子供は決して宅へ帰ってこない。これじゃ手もなく親子を隔離するために**学問させる**ようなものだ」**学問をした**結果兄は今遠い国にいた。

(漱石『こころ』)

- (4) 「やはり起きていないんだ。」と江口老人は言った。娘の頭のまんなかをつかんでゆすぶると、娘は眉を苦痛で動かすように見えて、体をうつ伏せに半ば**寝がえり**した。

(川端「眠れる美女」)

- (5) 「(略) この物音で鳶子も目をあきましたが、私だということ
 がわかったので (三郎さんおどかしちゃいやよ。私は眠
 いから寝るわ) と、あちら向きに**寝がえり**をして、そのま
 ままた眠ってしまいましたけれども (略)」

(川端「散りぬるを」)

- (6) たえず自分に彼女を**惹**していると言いきかせているこの不
 自然さに、心の本当の部分がちゃんと気づいていて、悪意
 のある疲れで抵抗するのであった。 (三島「仮面の」)
- (7) 私は演技を忘れたのであろうか？ 全く正常な人間として**惹**
をしているというお定まりの演技を？ (三島「仮面の」)
- (8) 当時は、ヨーロッパにおいても、まだ麻酔薬は発見されて
 いなかった。麻酔なしの外科手術だから、やるほうも大変、
 やられるほうは死ぬ以上の苦しみだった。痛さであばれま
 わる患者を**手術**していた。 (星『きまぐれ』)
- (9) おじいちゃんは、三年前に**手術**をして、胃を半分とってし
 ました。 (林史典他『現代国語』)
- (10) 毎日が平凡なための欲求不満が**蓄積**してこうなったのだろ
 うか。 (星『エヌ氏の』)
- (11) 「さあ、それでもうつ気か。同時にこの子供に**命中するぞ**」
 (星『エヌ氏の』)
- (12) 外見は完全な武士。しかし、用事環境で**形成された**性格と
 になると、容易に変えられぬ。いかに意志と理性で**克服**しよ
 うとしてもである。 (星『気まぐれ』)
- (13) 然し、当時の行内の会議では、ある調査部の幹部が構想に
 疑念を挟んだのに対して、トップの鈴木茂頭取はそれを一
蹴したとされる。 (北海道『解明・拓銀』)

2. これまでの研究について

これまで「VN をする」についての研究は、前述したようにあまり
 多くなされていないが、そのうち、もっとも具体的な成果を示して

いるものとして田野村（1988：71-76）が挙げられる。氏は「VNをする」が成立するためには、VNの性質として次の三つの条件を満たさなければならないと述べている。すなわち、

- (A) 単純サ変動詞文型が自然な表現として成立するには、「する」（＝「行う」）と言うに足る動作・行為を表していることが必要である。

また、(A) が成立するためには次の三つの必要条件が導かれる。

- (A₁) 単純サ変動詞文型が自然な表現として成立するには、意図的な事柄を表していることが必要である。

- (A₂) 単純サ変動詞文型が自然な表現として成立するには、し始め、し終わるような性質の事柄を表していることが必要である²。

- (A₃) 心理的な事柄を表わす場合には、単純サ変動詞文型は不自然になる。

- (B) 動詞概念部が、それ自体、「行う」ことを表すものである場合には単純サ変動詞文型は不自然となる。

- (C) 動作対象に対する別の動作・行為の表現が後続する同一の文脈においては、複合サ変動詞文型³の方がふさわしい。

そして、(A₂) をめぐって＜事実上、無動作・無行為である場合（例：九時に受付を開始する）＞、＜極めて短時間の動作・行為の場合（例：申し出を拒絶した）＞、＜表現の主眼が、その動作・行為の過程ではなく、その事態の達成に置かれる場合（例：二年間で日本語を習得した）＞、＜個別の行為ではなく、状态的・習慣的な事柄を表す

² 小林（2004：52-63）によるとUchida and Nakayama（1993）においてもアスペクト特性という観点からVNが「～をする」構文で使えるかどうかについての考察があるとのことであるが、その趣旨はほぼ田野村（1988）のそれと趣きを一にしている。この点については小林（2004）においてアスペクト特性では「～をする」構文で使えないVNを特定できないとの反論がある。

³ 氏の定義によると、「掃除する」や「散歩する」のように「～する」の形をした動詞を「複合サ変動詞」、「掃除をする」や「散歩をする」のようにヲ格の目的語を取る他動詞としての「する」を「単純サ変動詞」と称し、そしてそれぞれを述語をする文型を「複合サ変動詞文型」「単純サ変動詞」と称する、とのことである。

場合（例：健康を維持する）＞、＜主語の表すものの属性的な事柄を表す場合（例：山田は車を所有している）＞、＜断続的な事態を包括的に表現するもの（例：いろいろなことを見聞する）＞には単純サ変動詞文型は不自然となると指摘している。しかし、次に挙げる用例（14）～（19）と（20）・（21）はそれぞれ上掲の（A₂）のうちのいくつかの論点と（A₁）の反論になる。（14）と（15）における「決心」と「昇進」は事実上無動作・無行為に属するものである一方、（16）と（17）における「合図」と「会釈」はいわゆる極めて短時間の動作・行為であり、（18）の「急停車」と（19）の「寝がえり」は極めて短時間の動作・行為であるとともに表現の焦点がその事態の達成に置かれるものでもあると見受けられる。そして、（20）の「夢精」と（21）の「寝坊」は、文脈から、ともに意図的な事柄ではなく、無意識に起こった事柄と見るべきである。にもかかわらず、いずれも「VNをする」の形をとっている。これはつまり、氏の研究成果はそれなりに適用される側面もあるが、一般化するにはなお検討の余地があるということを物語っていると考えられるのである。

- （14）仕方がない、何でもよいから食べ物のあるところまで歩こうと**決心をして**そろりそろりと池を左に廻り始めた。

（漱石『我輩は』）

- （15）「（略）強盗を追い払った社員は、ボーナスとともに**昇進を**しました。」

（星『エヌ氏の』）

- （16）十吉はエンジンの馬力を落して、自分の漁場へ着くと、新治に**合図をして**、調革をエンジンにつけさせ、それを船べりのローラ・アシャフトに巻かせた。

（三島「潮騒」）

- （17）（略）きょうはめずらしく先に来ている支部長の安夫は、机のむこうから新治にきさくに**会釈をした**。（三島「潮騒」）

- （18）自転車は音もなく近づいてきた。櫂のかげから、私は自転車の前へ走り出した。自転車は危うく**急停車をした**。

（三島「金閣寺」）

- （19）娘は眠っていてもよく動いた。一夜のうちに二十度も三十

度も寝がえりをするのかもしれない。

(川端「眠れる美女」)

(20) ときたま私は夢精をすることがあった。(三島「金閣寺」)

(21) たしか十月中頃と思います。私は寝坊をした結果、日本服のまま急いで学校へ出た事があります。(漱石『こころ』)

田野村(1988)のほかに、平尾(1995)もある。平尾(1995: 92-94)

では「VN」の内包する意志性の程度の高低に関して考察を行い、その結果として「VNをする」の形が可能となるかならないかはその意志性の程度の高低と正比例すると指摘している。すなわち、意志性が高いほど(例:「勉強、選択、離婚、散歩」)「VNをする」の形が可能となるのに対して、意志性が低いほど(例:「堆積、類似、漏水、気乗り」)「VNをする」の代わりに「VNする」の形が使用されているということになる。そして、この意志性という動詞の性質も「～のVNをする」という構文の成立いかんに関わっており、「～のVNをする」構文が成り立つのは最も上位な意志性を有する動詞であるとも主張されている。意志性という観点から見れば、例えば前掲の例文(16)～(18)は、「VN」そのものに意志性が含まれているし、談話場面においても動作者が意図的に動作を行うと見受けられるから、難なく解釈がつく。これに対して、(19)と(21)の場合は、動詞自体に限って意志性の上であるなしの両方がともに考えられるが、

(19)と(21)それぞれの場面では当該「VN」が意志性のあるものとは思えない。「VN」の意志性というのは実際の場面いかんに関わらず、「VN」自体についてのみ指すのかどうかについては、平尾(1995)では言及されていない。一方、用例(18)、さらに次に挙げる例文(22)～(24)は、確実に意志性のない動詞であるにも関わらず、依然として「VNをする」または「～のVNをする」の形式で表現されている。これは氏の説とは全く逆な例文であると言わざるをえない。

(22) 刀か何かで負傷をした場合だ。ショウチュウで傷口を洗い、

白い布を巻きつけて手当てをしている。(星『きまぐれ』)

(23) あら、だれも来ていないわ、私、**勘違いをした**のかしら。

(林史典他『現代国語』)

(24) 「(略) おまえと組んで、新興成金を相手に大がかりな手形詐欺をやり、気持ちのいいほどの**成功をした**ものだ」

(星『エヌ氏の』)

3. 「VN をする」・「VN する」における「する」の働き

構文の上では、例えば「勉強をする」、「掃除をする」などのように、サ変動詞「スル」は本動詞であり、「勉強」、「掃除」などの「VN」は目的格の「ヲ」によって「スル」の目的語となる。これに対して、「勉強する」、「掃除する」などのようにサ変複合動詞の場合には、語構成の立場から言えば、「勉強」、「掃除」は語基に当たり、「スル」は接辞になると考えられる。換言すれば、「勉強する」、「掃除する」などのようなサ変複合動詞の場合には語の意味の中核をなすのは「勉強」、「掃除」などの「VN」であり、「スル」は「VN」を動詞として構成させるための接辞的な働きを持つものに過ぎないということになる⁴。この点については次に挙げる例文(25)～(29)からも分かるように、「スル」を省き、「VN」単独でも文の述語として十分に働きうるという事実によって裏付けられる。

(25) 拓銀傘下に入ったエイペックスとリッチフィールドが九三年七月にカブトデコムの佐藤茂社長を**告訴**、札幌地検が同十二月に**逮捕**、起訴した。(北海道『解明・拓銀』)

(26) 首相だった彼は協調外交をとなえ、海軍の反対を押し切って、ロンドン軍縮条約を**承認**。その会議の終了後、東京駅において右翼の青年、佐郷屋留雄に拳銃でうたれた。

(星『きまぐれ』)

⁴ この事実を反映して、サ変複合動詞の「スル」は文法的機能(すなわち動詞であること)は有するが、語彙的な意味を持たない「軽動詞」(light verb)と呼ばれることがある。

- (27) “みなさん、お手を**拝借**”というリーダーの声に応じて、
みんなでシャンシャンシャンとやるとき、それにうまく合
わないのが出てくる。 (柴田『知ってるようで』)
- (28) まず、山三西武地産、丸三昭和通商といった“地上げ部隊”
の関係会社に土地を取得させ、それらの会社からカブトが
建物の建築を**受注**。 (北海道『解明・拓銀』)
- (29) (略) 父親のほうは顔や足に噛みつかれ、殆んど戦意を失っ
てしまったが、十一歳の少年が鎌で**応戦**、自分の鎌は狼に
噛み砕かれたが、父の鎌を取って、柄を狼の口に突っ込み、
石で叩いて打ち殺した上に、(略) (平岩『ものは』)

このような使われ方は文中、文末ともに現われるが、といって任意に用いられるものではない。文脈から見ると、意味的には、文中では「し」または「して」、すなわち中止、文末では本来「VN」の後にあるべき「スル」やその過去形、丁寧表現・普通表現を問わず、かつ、ともに肯定形の場合に限ってその省略が認められるのである。文中において構文の必要に応じて連体修飾を要とする場合や、その後例えば「ば」、「の」、「たり」、「ながら」といった格・接続助詞や「たい」、「ようだ」、「せる」といった助動詞に従えるべき場合や、また文末において「～てください」、「～たい」といった命令、希望、依頼など、モダリティ表現に後接する場合や、打ち消し、意量、使役、受身などを構成する場合には、名詞的な「VN」のみではその意図を全うすることができず、動詞「スル」の仲介に頼らなければならないので、「VN スル」の形をとるべきことは言うを待たない。

4. 「VN をする」・「VN する」における意味的な違い

上掲の例文(1)～(5)からも分かるように、同一の形態をとる「VN」には「VN をする」の形で表現される場合もあれば、「VN する」の形で表現される場合もあり、一般的にはこの両形式は意味内容の上で殆ど変わりがないと言われている。次に挙げる例文

- (30)・(31)、(32)・(33)、(34)・(35) では、このような説を確

認することができる。つまり、それぞれのペアのうち、もとより「ヲ」がついている場合、それを取り除いても、あるいはもとより「ヲ」のついていない場合、それを付け加えても、両者は意味的にもニュアンス的にもなんら異なるところを感じ取ることはないと思われる。

(30) やがて爺さんは、もうよかろう、引っ張らっしとか何とか云うと、婆さんははあーと答える、娘はあいと**挨拶**をして、名々に蛇の頭を持ってぐいと引く。 (漱石『我輩は』)

(31) 車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入って来る。「やあ、来たね」と雪江さんに**挨拶**しながら、例の有名なる長火鉢へ、ぽかりと手に携えた徳利様のものを抛り出した。 (漱石『我輩は』)

(32) 「聴き捨てならないことをいうね。今、僕は悦子さんに**忠告**をしていたんだよ (略)」 (三島「愛の」)

(33) (略) その男は札付の不良であることから、たびたび三郎は美代に**忠告**したが、この忠告が肯かれなかったとか。 (三島「愛の」)

(34) みな、同じように息子を持ち、それを心から愛し、なにをしても許し、まもってやる、優しく善良な父親たちなのだ。
(略) アール氏は**微笑**をした。危険な年代と呼ばれようが、いっこうかまわない。親心以上に強い力が、この世の中に存在するだろうか (星『エヌ氏の』)

(35) 車の中では、ばんばんという叫びが断続し、そのたびに三郎は首をすくめなくてはならなかった。通りがかりにのぞきこむ人もあったが、**微笑**しながら去っていった。三郎はそれを見て、今までは無事に進んでいるらしいと感じた。 (星『エヌ氏の』)

しかし一方、次に挙げる例文 (36)・(37)、(38)・(39)、(40)・(41) のように、よく吟味すれば、それぞれのペアのうち、「ヲ」が介在しているかいないかによって意味的に明白な違いがあることに気づくのである。(36)における「食事」は、朝食、昼食、夕食と一日の三食のように一つの事象として動作者がそれに関わると読み取

れるが、これに相反して、(37)における「食事しながら」は談話場面から「食べる」という動作が実際に実践されている、いうなれば、食事進行中という過程に身が置かれていると感じられるのである。

(38) と (40) のそれぞれにおける「恋をしている」と「残業をし(てい)た」、そして、(39) と (41) のそれぞれにおける「恋している」と「残業している」も、(36)・(37)の場合と同様に解釈できる。つまり、「恋をしている」においては、動作者は「恋」をある特定の異性に寄せるという一つの事象として実践しているのに対して、「恋している」においては動作者はすでにそのような心的状態に身を置いているのである。他方、「残業をし(てい)た」においては、会社の業務そのものを一つの事象として執り行っ(てい)たのに対して、「残業している」においては逆に業務それ自体が捨象され、動作が実行されている、言い換えれば、動作進行中という過程に身が置かれていると読み取れるのである。

(36) それに、私の執筆時間は夜から明け方にかけてとなっている。つまり、起きるのが正午ごろとなる。**食事をし**、新聞や雑誌などを読み、来客と会ったりすると、いつのまにか夕方になる。また**食事をし**、テレビを眺めたているうちに、執筆時間となるのである。(星『きまぐれ』)

(37) すると、突然筒井さんが(略)きたない話をしゃべりはじめた。なまじっかな程度のものでなく、極端でリアルで、えんえんとつづくのである。(略)これは彼がのちに「最高有機質肥料」という作品に書いたから、好奇心のあるかたは、それをお読みになるといい。**食事しながら**読めたら、えらいものだ。(星『きまぐれ』)

(38) 私は演技を忘れたのであろうか？全く正常な人間として**恋をしている**というお定まりの演技を。(三島「仮面の」)

(39) たえず自分に彼女を**恋している**と言いきかせているこの不自然さに、心の本当の部分がちゃんと気づいていて、悪意のある疲れで抵抗するのであった。(三島「仮面の」)

- (40) 数日後。その青年は**残業をした**。会計課では彼ひとりだったが、隣室の総務課でも同僚の一人が**残業をしていた**。

(星『エヌ氏の』)

- (41) 「昨夜、きみが**残業している**時、強盗が入ったという報告だが…」

(星『エヌ氏の』)

以上の分析から「VNをする」構文と「VNする」構文は、各々意味の上では必ずしも同様とは限らないということが分かった。「VNをする」・「VNする」という形式上の違いのあるなしにより、意味的相違が生じるか生じないかの境界はどこにあるかという、上掲の二つのグループの用例を対照してみれば分かるように、「VN」の性質の違いにあると考えられる。「ヲ」の介在の有無に拘わらず、意味的に変わりがないと思われる用例群(30～35)では、「忠告」を例にすると、それは、『新明解国語辞典第五版』によれば、「心から相手のことを思い、早く悪い所を直す(危険なことはしない)ようにと、個人的な立場から言い聞かせること。また、その言葉」という意味である。「言い聞かせる」は動作者の動作であり、「その言葉」は動作者が自らの有している考えを言語の形に変えて表現するものである。ちなみに、「言い聞かせる」にせよ、「その言葉」にせよ、要はいずれも動作者自身に内在しているものである。それを動作者が何らかの動作(ここでは「言う」)を通じて外的に示せばすむゆえ、一つの事象として取り扱うまでのこともない。すなわち、「VNする」という形で表現すれば十分なのである。それにわざと「ヲ」を介入させて「VNをする」の形にする理由の一つとして、口語的な域から文章的な域へ、換言すれば、くだけたムードから改まったムードへと近づかせようという文体の考慮があるのではなかろうかと考えられる⁵。これがために、「ヲ」がついているかいないかに拘わらず、同一の意味内容を示すということになるのではないと思われる。

⁵ ちなみに、日本の新幹線の車内アナウンスでよく聞かれる「間もなく…(停車駅名)に到着をいたします」もこの観点から解釈がつくのではないと思われる。

また、「挨拶」、「微笑」の場合においてもそれぞれの中から同様な特徴を析出することができる。

さて、引き続き「ヲ」の介在の有無によって意味内容が異なってくると思われる例文(36)～(41)について見てみる。まず「食事」は、同じく『新明解国語辞典第五版』によれば、「おなかがすくに従って、主食と副食とを組み合わせることを食べる。また、その食べ物」とある。主食、副食というのは動作者とは掛け離れた存在物である。その主食、副食を食べる、つまり食事それ自体は動作者にとって一つの事象として成り立つはずである。一方、「恋」は、同辞典によると、特定の異性に愛情を抱くという心的作用であるゆえ、その心的作用を発動して特定の異性に自らの愛情を寄せるということはすなわち「恋」をするということである。ちなみに、「恋」も当の動作者にとっては一つの事象として取り行うのに十分な資格を有しているはずなのである。また、「残業」はもとより正常な勤務時間の後に会社に残ってする仕事という意味であるゆえ、動作者にとって事象として外在するということはもはや贅言を要しまい。このように見てくると、同一の「VN」ではありながら、「ヲ」の介在の有無によってその意味する内容も異なってくるとするのは、当の「VN」が動作者にとって一つの事象として存在するという特徴によるものであることが分かる。

しかし、「VNをする」のように「ヲ」をさしはさむことによって、それがさしはさまれていない「VNする」と意味の上でなんらかの違いが出てくる場合はそれなりに構文的に意義のあることは納得が行くが、「ヲ」がさしはさまれていようがいまいが、また、ニュアンスの上で多少違いが感じられようが、意味的には変わりがない場合に、「VN」と「スル」との間に「ヲ」を介入させるのはなぜだろうか。先述したように、その理由の一つとして文体の差、あるいは談話の雰囲気、丁重化とでもいうものが考えられる。そのほかに、次に挙げる例文(42)における「妊娠をした」と(43)における「妊娠した」とは、一見、意味的にはなんら変わりがない、強いて言え

ば、前者が後者に比べて比較的丁寧な言い方であると思われるが、(42)における「江口との不倫が女から洗い落とされた」という文脈からは、「妊娠をした」は女が意図的に懐妊したと解釈できないわけでもない。従って、意味的に変わりがないにも拘わらず、「VN する」をわざと「VN をする」という形に言い換えるにはそれなりに様々な理由があると考えられる。その要因を解明することは興味深いものであるが、現時点ではそこまで分析を拓げるのに十分な資料を持っていないので、今後の研究課題としたい。

(42) たよりをよこさなくなったのは、女が**妊娠をした**からだっ
たのか。そうだったかと江口老人は微笑が浮かんで来そう
だ。シンガポールから戻った夫を迎えて、女が**妊娠をした**
ということは、江口との不倫が女から洗い落とされたかの
ようで、老人を安らかにした。 (川端「眠れる美女」)

(43) 神戸の若い人妻が二年ぶりに夫の帰りを迎えて、すぐ**妊娠
した**のだろうという、不意の想像、その想像はたしかに事
実に違いないという、必然のような実感、江口老人を急
にははなれなかった。 (川端「眠れる美女」)

5. 「VN をする」構文における「VN」の性格

先に2.に述べたように、田野村(1988)では単純サ変動詞文型が自然な表現として成立するには意図的な事柄を表していることが必要であるとともに、し始め、し終わるような性質の事柄を表していることが必要であり、その目安として「～している最中だ」「～している所だ」等と表現できるものと指摘している。この田野村氏の主張についてすでに2.に挙げた反例からも分かるように、そのような性質を有している「VN」は「VN をする」構文を成立させるための条件の一部ではあるものの、決してすべてではないことが確実なのである。この節では「VN をする」構文の成立における「VN」の性格について検討してみる。

まず動作の仕手を、人間(擬人化の場合を含む)を代表とする有

生物である場合と、人間以外の無生物の場合に二大別することができ。動作の仕手が無生物の場合は例文（44）～（48）に示すように、動詞の自他や、動作の有無、動作の進行にウエイトが置かれているか、または結果・状態の持続に焦点が置かれているかといった動詞の性質いかんに拘わらず、原則として「VNをする」の表現形式をとらないということが指摘できる。これは、前にも述べたように、「VNをする」構文において「スル」は本動詞として働くものであり、無生物はもとより意図的に行為を行う能力を持っていないことによるものと考えられる。

（44）ここはかつて海であり、船がよく**座礁した**らしいが、そのあとをとどめぬ変貌ぶりである。（星『きまぐれ』）

（45）自分がそうなのだから、子供もそうにちがいないと、年末に家族づれでジャルパックを利用、ハワイに行った。子供は小学の二年と三年の女の子で、空の旅ははじめてで、**離陸する**やいなや、私は「さあ、下を見てみろ」と、さいそくした。（星『きまぐれ』）

（46）そういう肯定的用法の例はもちろん以前にもありますが、一種の言語的流行現象としていっせいに**波及した**ところに、一つの時代風潮を見ることができると思います。

（大野他『日本語 四』）

（47）当時すでに軍人向き教育が私の学校を**侵蝕し**、名高い江木将軍の「質実剛健」の遺訓が蒸し返されて、派手なマフラーや靴下は禁じられていた。（三島「仮面の」）

（48）それは光が落ちてくるとしか思われなかった。靴が運んだ泥で塗られたコンクリートの贗の泥濘へ、次々と喚声をあげながら、光が身を投げて**墜死する**のだった。

（三島「仮面の」）

次に、動作の仕手が人間を代表とする有生物の場合について、上掲の例文（36）～（41）からも分かるように、先述した無生物の場合とは逆で、「VNをする」の形をとることが可能であると指摘するこ

とができる。これは、人間はもとより行為を行う能力を有するものであり、従って、「VN」を一つの独立した事象として処理するのも可能であることは言うを待たない。とはいっても、例えば前出の例文(10)～(14)に示したように、ありとあらゆる「VN」を任意に一つの独立した事象として執り行うものではないとも見受けられる。換言すれば、それには「VN」の性格が関わっていると考えられるのである。以下、この点について検討してみる。

例文(49)～(59)はすべて「VNをする」で表現されるものである。(49)～(51)のそれぞれにおける「注射」・「援助」・「貯金」は動作者にとって一つの外的な事象として顕在しており、かつ「し始め」、「している」、「し終わり」という性質を有している一方、文脈からもそれを行う意図性がうかがわれる。

これは田野村(1988)の指摘に一致している。一方、(52)～(54)における「寝がえり」・「目隠し」、「会釈」、「解散」もそれぞれ外在的な事象として成り立つ点では(49)～(51)の場合と同様と認められるが、いずれも極めて短い時間のうちに遂行されうる所謂瞬間的な「VN」という点では異なっているとも見受けられる。これは、田野村(1988)によれば、「VNをする」が自然な構文として成り立つための条件からはみ出ていると言ふべきなのであるが、実際多用されているのも看過できない。更に(55)、(56)における「手分け」、「負傷」は上掲(49)～(54)の場合に比較してその事象としての顕在性が薄れ、そして(57)～(59)の「苦笑い」、「心配」、「遠慮」は、感情、心理という内面的抽象的なものになり、いっそうその顕在性が薄れていると思われるが、依然として自然な「VNをする」構文として成り立っている。従って、事象を積極的に実行する意図性の有無、または「～しているところ」という進行中を表す性質は、「VNをする」構文を成立させるための一側面の条件であることは頷けるが、必ずしもその必須条件ではないということが分かる。例文(49)～(59)に一貫している特徴としてなんらかのきっかけにより、動作者がある事柄を一つの事象として執り

行うか、ある新たな事象が発生するということが挙げられる。例えば、(49) の場合では「からだがよくないのは、事実でもあるのだ。

(略) 自己分析をこころみるに、私の場合、他人との会話は、仕事や作品を話題にすることが多い。しかし、病院に出かけると、それらとは無縁の話ができるのである。つまりストレス解消で、私はそれを求めているらしい」⁶ という作者の叙述から、病気の治療の場合は言うを待たず、ストレスを解消するために自ら病院に通って注射を求めるのであるとことが分かる。すなわち、病気やストレス解消がきっかけとなり、注射という出来事を実行に移すということになる。(53) ではその文脈から新八郎が祖母が隣の女性と座席を換わったのに気づき、迷惑をかけたと思ったので、礼儀として相手に軽く頭をさげたととれる。言い換えれば、迷惑をかけたと思うのがきっかけとなり、会釈ということを実行に移すとして差し支えなかろう。また、(58) では文脈から自分が怒って家を出たというきっかけにより、自分の身の上に何か起こるのではないかと妻が不安な気持ちでいるのだろうという事態が引き起こされたと読み取れる。このように見てくると、「VNをする」という形の構文からは上記のような「なんらかのきっかけにより、ある新たな事柄を実行に移す」という特徴を抽出することができるのである。ここでとりわけ「きっかけ」という点に注意されたい。一般に他動詞の意味内容について論ずるに当たって、動作者がある物事に働きかけて、それを変えたり変化させたりするといったようなところに注目されがちなのであるが、当の物事への動作者の働きかけを引き起こすきっかけのほうは往々にしてなおざりにされてしまうと見受けられる。事実きっかけがあるからこそ、ある事象を執り行うというのがむしろ普通なのである⁷。

⁶ 星新一『気まぐれ暦』p.192

⁷ 小林(2004: 70)では語彙概念構造の観点から外項をもたない動名詞が「～をする」構文で使えない動名詞であると指摘している。これは、言い換えれば、動作主が自らの意志に基づいて当該動名詞の表す動作なり変化なりへの制御がきかない場合、「～をする」構文が成り立たないということになる。しかし、これは例えば本稿で引用した例文(44)の「船が座礁した」や(45)の「離陸す

- (49) 診察室と待合室がいっしょで、私が**注射をしてもらっている**時に、次の患者が入ってきたりする。(星『きまぐれ』)
- (50) 政府軍にはソ連が武器を送ったが、フランコ軍にはドイツ、イタリーが**援助をし**、反乱軍やや優勢。(星『きまぐれ』)
- (51) 「発心して、急に**貯金をしよう**という気になんか、とうていなれないでしょう。これがあなた、長い病気でしても、病院にでも入れて、金の工面に苦しんで、そして死なれたんなら、同じ寂しいにしても、やっぱり**貯金をして**おかんと困るものだという気にはなりますわよ」
(川端「散りぬるを」)
- (52) 「(略) この物音で鳶子も目をあきましたが、私だということがわかったので、(三郎さんおどかしちゃいやよ。私は眠いから寝るわ) と、あちら向きに**寝がえりをして**、そのまま眠ってしまいましたけれども、もし目を覚まして声でも立てられると困ると思いましたので、階下から持ってきてあったタオルで猿轡をはめ、その壁にかかっていた手拭で**目隠しをして**、そこらにあった紐で両手を縛ったのでありますが(略)」
(川端「散りぬるを」)
- (53) シートベルト着用サインの消えるのを待つて、椿井新八郎は席を立った。(略) スチュアデスにことわって通路のカーテンをくぐった。ここから先はファーストクラスになっている。おや、と思ったのは成田で席へつれて行った時、前から三番目のB席だったのに、その席には見知らぬ女性がすわっている。祖母のはなは、その隣に居た。しきりと窓をのぞいている。「ばあちゃん」声をかけておいて、祖母の隣の女性に**会釈をした**。
(平岩『秋色(上)』)
- (54) 安倍官房長官は、四日のNHK国会討論会で衆院解散問題に触れ「私自身が**解散をし**ろ、というようなことはいった

ことがない」[中略]と述べ、最近首相側近から流れている

“解散説”について釈明した。（寺村『寺村秀夫 I』）

(55) 憲兵は**手分けをして**、金剛院を四方から囲むことになった。

（三島「金閣寺」）

(56) 刀か何かで**負傷をした**場合だ。ショウチュウで傷口を洗い、
白い布を巻きつけて手当てをしている。（星『きまぐれ』）

(57) 私が先生々と呼び掛けるので、先生は**苦笑いをした**。私はそれが年長者に対する私の口癖だと云って弁解した。

（夏目『こころ』）

(58) 「悪いことをした。怒って出たから妻はさぞ**心配をして**いるだろう。考えると女は可哀想なものですね。私の妻などは私よりほかにまるで頼りにするものがないんだから」

（夏目『こころ』）

(59) 願わくばもう少し**遠慮をしてもらいたい**。（夏目『我輩は』）

一方、次に挙げる例文（60）～（68）はいずれも「VNをする」構文をなさないものである。この点については、まず、「VN」の内包している動作性から言うと、（60）の「持参」や（61）の「服用」のように具体的な動作が顕在しているものもあれば、（62）の「展開」や（63）の「酷使」のように動作性が抽象化され、動詞的性質のみ看取できるものもある。また（62）の「期待」や（63）の「意識」のように心理的・知的な活動を表すものも見られる。次に、その動作の性質から見ると、（60）の「持参」そして（67）の「劇画化」、（68）の「気化」・「液化」は「～している」の性質を有していないものであるが、その他はいずれも「～している」の性質を有しているものである。従って、「VNをする」構文をなさないのは「VN」の内包している動作性の顕在か否か、または「～している」という動作の性質の有無とは関係がないと考えられる。実際に例文に即して吟味してみると、それは、これらの「VN」は文中において事象として処理するというより、動詞として働く、すなわちその動詞的性質の実行が要求されているという性格によるものであることが分か

る。例えば、(60)における「持参した」は事象と動作との両側面のうち、もし事象として執り行われるのであれば、「これの持参をした」、「その持参をした」、「持参をした」といった表現が成り立つはずであるが、事実それらのような表現はむしろ非文か不自然という感じがするのである。その名詞的性質の実現よりも、何かを持ってどこかへ行くという動作が現実に行われるのにウエイトが置かれている、言い換えれば、その動詞的性質の実現が優先されると思われるのである。その他の「服用する」、「展開する」、「酷使している」などの場合においてもこのような解釈がつく。一方、(62)における「期待した」、(63)における「意識していた」といった心理的・知的な活動を表す場合ではそれが現実が発動され、表出されたからこそ成立するものであるから、上記の「持参」など具体的な動作を表現する場合よりいっそう動詞としての働きが優先されるものと見受けられる。また、(64)～(66)における「頻発する」、「連発している」、「愛用する」、そして(67)と(68)における「劇画化した」、「気化させる」、「液化させる」については、田野村(1988)では、前者は所謂習慣的、属性的事柄を表すものであり、後者は表現の焦点がその事象の達成に置かれるものであって、ともに「VNをする」の代わりに「VNする」構文をとるべきものとされているが、習慣的、属性的または事態の達成が焦点と云々するよりも、実際これらのようなものも上の分析に見るように事象として処理するのではなく、「VN」の内包している動詞的性質がもはや現実実践されているゆえ、「VNする」構文をとるべきなのであると思われる。

(60) エフ氏はこれをお菓子にまぜ、さりげない様子で**持参した**。

(星『エヌ氏の』)

(61) その薬の発明者、肺炎にかかってもはや助からぬと知った時、それを**服用する**のである。(星『きまぐれ』)

(62) 交通“戦争”と名づけたからには、マスコミもよほどの決意でキャンペーンを**展開する**のかと**期待した**が、ただ衝撃の効果を一時的に高めるだけだったようだ。

(星『きまぐれ』)

- (63) これは私の想像だが、心のすみで、藩医であることから離れようと**意識していた**のではなかろうか。晩年の彼は自分の肉体を無理に**酷使**している。(星『きまぐれ』)

- (64) 中曽根総理は、「個別的自衛権」「政治戦略的」「大乘的見地」など、よく「的」を使います。プロ野球解説者は、「気持ち的」「欠点的」を**頻発**します。(大野他『日本語 一』)

- (65) ナカソネ氏の悲劇もまさにこの錯覚にありました。「……的」「……的」を**連発**しているうちに、自分がなんだか偉そうなものに思われはじめ、結局はアメリカの知的水準をウンヌンして失言、その痴的本性を満天下にさらしてしまいました。(大野他『日本語 一』)

- (66) すでに「長歌」は全体としては衰えはて、ごく少数の歌人が時に応じて**愛用**し、面白い作品をつくるにすぎないものになっていました。(大野他『日本語 四』)

- (67) また、テレビ番組を**劇画化**したものもある。

(星『きまぐれ』)

- (68) それを蒸留すると、ショウチュウ、ウイスキー、ブランデーになる。すなわち、醸造酒に熱を加えてアルコール分を**気化**させ、それをひやして**液化**させてとり出す。

(星『きまぐれ』)

なお、漢字一字の場合については、例えば「旅」、「恋」、「損」などのように、「VNをする」・「VNする」の両形式をとともにとることができるごく少数の語の場合を除けば、訓読みの場合は贅言を要せず、音読みの場合でも次に挙げる例文(69)～(72)のように、一般的に事象としての資格を持たず、動詞として用いられるとされている。そのうち、例文(69)、(70)に示すように、「愛」、「興」は一つの事象として取り扱われうると思われるものもあるが、動詞として働く「愛する」、「興じる」は、名詞としての「愛」、「興」とは分離されて別物となり、そこには事象として成り立つ成分が含まれて

いないゆえ、「愛をする」とか、「興をする」という表現がなく、その動詞的性質のみが表現の焦点となる。(71)の「激した」、(72)の「達した」の類に至っては、名詞としての働きがなく、専ら動詞としての働きを有するものとなるのである。

(69) しかし私は、二人の指のあいだに交わされた稲妻のような力の戦きと共に、私の彼を見つめた一瞬の視線から、私が彼を——ただ彼をのみ——**愛している**ことを、近江が読みとったと直感した。
(三島「仮面の」)

(70) こういう当て物の言い争いに**興じながら**、意見が岐かれて口喧嘩をはじめる夫婦の若々しさはまるで芝居をやっているのじゃないかと思われるほどで、三十八歳と三十七歳になる夫婦の会話とは思えなかった。
(三島「愛の」)

(71) 妻から何か云われた為に、私が**激した**例は殆どなかった位ですから。
(夏目『こころ』)

(72) たえがたい、狂おしい雰囲気。それが絶頂に**達した**時、電話のベルが鳴った。
(星『エヌ氏の』)

6. 構文論的観点から見た「VNをする」・「VNする」

最後に構文論的観点から「VNをする」と「VNする」それぞれの構文におけるいくつかの制約について見てみる。まず、「VNをする」構文については、「VN」が連体修飾節を従えている場合、意志的か非意志的か、あるいは継続的か瞬間的かなど、「VN」の性質いかに問わず、次に挙げる例文(73)～(78)のように、「VNをする」の形をとらなければならない、厳密に言えば、「～VNをする」構文として表現されるべきなのである。これは、連体修飾節を従えと、「VN」の内包する動詞的性質が抹消され、「～VN」全体が一つの事象として取り上げられることに起因するものと思われる。事実、日本語において、例えば「気持のいいほどの成功した」や「とんだ後

悔した」の類はそもそも非文であることは贅言を要しまい⁸。

- (73) 「(略) お前と組んで、新興成金を相手に大がかりな手形詐欺をやり、気持ちのいいほどの成功をしたものだ。(略)」

(星『エヌ氏の』)

- (74) 私は万博や心臓移植、金星ロケットの類を論じはしたが、三面記事的な具体的犯罪事件について、意見の表明をあまりしていないはずだ。

(星『きまぐれ』)

- (75) べつな形容をすれば、蒸溜されちゃっているのである。エッセンスだけが純粹に取り出され、どろどろした他の部分が除去されている。

(星『きまぐれ』)

- (76) (略) 読まんでもよかろうなどと思うと 飛んだ後悔をする。是非仕舞まで精読しなくてはいかん。

(夏目『我輩は』)

- (77) やがて何かの加減で私は 一つの発明をした。

(三島『仮面の』)

- (78) 「ふうん。その相手の男性が妻子持ちだったりしたら、永久に確認されずじまいになるかもね」などと、不必要に話を広げるような 憶測をする 聡子である。(西澤『転・送』)

一方、文中において目的格または空間の移動、経過を表す「を」が出現している場合、次に挙げる例文(79)～(82)に見るように、「VNをする」の代わりに「VNする」構文を取るべきなのである。

- (79) と(80)において目的格の「を」はすでに現われているが、文中における「…空気を呼吸している…」と「…フィルムを現像してもらえば…」をそれぞれ「…空気を呼吸をしている…」、「…フィルムを現像をしてもらえば…」に書き換えると、目的格「を」の重複により非文となる。(81) と(82)における「…遠い地方を…旅し

⁸ 影山(1993)では「NPのVNをする」構文における「NPのVN」は「完了結果に片寄らない継続動作」を表していなければならないと述べているが、本稿の用例(73)や(77)、または例えば「失敗をしたとき、それをそのまま忘れてしまい、また次の失敗をする、ということを繰り返すことになる可能性があります。」(「金融経済論」講義 02年5月20日

file:///D:/tende/public-html/okabe/message/kougi-5.txt)に見るように、「NPのVN」が継続動作を表す場合は言うまでもなく、完了結果を表す場合においても「NPのVNをする」構文が可能であることが分かる。

た」と「アメリカを旅行した…」の「を」は空間の移動を表すものであるゆえ、目的格「を」を挿入してそれぞれ「…遠い地方を…旅をした」と「アメリカを旅行をした…」に書き換えても理論的には妨げはないと思われるが、「旅をした」、「旅行をしている」となると、「VN」に当たる「旅」、「旅行」はその内包する動詞的性質、つまり移動という意味特徴が捨象され、単なる一つの事象として取り上げられるものになってしまうので、結果的には依然として非文と言わざるを得ないのである。

(79) 比較的自由な空気を呼吸している今の貴方がたから見たら、定めし変に思われるでしょう。(漱石『ころも』)

(80) なかのフィルムを現像してもらえば、おれが三十分以上は部屋をあけなかったことがはっきりする。(星『エヌ氏の』)

(81) 祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をししばしば旅した。
(三島「仮面の」)

(82) アメリカを旅行した時には、古本屋で買い集めた。
(星『きまぐれ』)

7. おわりに

以上、「VN する」・「VN をする」の両構文形式の使い分けについて検討してみた。主な結果をまとめると、次のようなことが挙げられる。(1)「VN をする」構文が成り立つためには「VN」が一つの事象として存在しなければならない。この表現形式には動作主体がなんらかのきっかけにより、ある新たな事象を実行に移すという特徴が潜在しているゆえ、「VN」が一つの事象として認められさえすれば、その「VN」が顕在的な事象か、感情、心理という内面的抽象・的な事柄かを問わず、また、継続動作を表すものか、完了結果を表すものか、あるいは動作主体の意志的制御がきくか否かに拘わらず、「VN をする」構文が可能なのである。(2) 文脈から言えば、「VN」の名詞的性質が優先される、すなわち事象への処理に焦点が置かれている場合には「VN をする」構文で表現されるべきであるのに対

して、「VN」の動詞的性質の実践が要求される、すなわち動作の発動、表出に焦点が絞られている場合には「VNする」構文をとるべきなのである。(3) 動作主体が人間(擬人化の場合を含む)である場合は「VNをする」構文を用いることが可能であるが、人間でない場合は「VNする」構文を使うべきである。(4) 「VN」が連体修飾節を従える場合には「～VNをする」構文をとるべきである。(5) 文中にすでに目的格または空間の移動、経過を表す「を」が含まれている場合は「VNする」として表現されるべきである。

なお、先述したように目的格「を」の介在の有無に拘わらず、「VNする」構文と「VNをする」構文との間にニュアンス的に多少とも違いが感じられはするが、意味的には変わりがない場合もある。そこには、文体差、または談話の雰囲気 of 丁重化、あるいは動作主体の意図性など、様々な要因が絡んでいると考えられる。全体としてどんな様相を呈するかについて究明を要とするのであるが、この点をめぐっては現時点では資料がなお不十分であるので、今後の研究課題としたい。

用例出典

大野晋 丸谷才一 大岡信 井上ひさし『日本語相談一』(朝日新聞社 1991)

大野晋 丸谷才一 大岡信 井上ひさし『日本語相談四』(朝日新聞社 1991)

川端康成「眠れる美女」『眠れる美女』(新潮文庫 平成十一年)

川端康成「散りぬるを」『眠れる美女』(新潮文庫 平成十一年)

柴田武『知ってるようで知らない日本語』(PHP文庫 2002)

寺村秀夫『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』(くろしお出版 1992)

夏目漱石『こころ』(新潮文庫 昭和五十五年)

夏目漱石『吾輩は猫である』(新潮文庫 昭和五十四年)

- 西澤保彦『転・送・密・室』（株式会社講談社 2000）
- 林史典 麿岡昭夫 教育社国語編集部『現代国語用例辞典』（教育社 1992）
- 平岩弓枝『秋色（上）』（株式会社文芸春秋 2003）
- 平岩弓枝『ものは言いよう』（株式会社講談社 2000）
- 北海道新聞取材班『解明・拓銀を潰した「戦犯」』（株式会社講談社 2000）
- 星新一『きまぐれ暦』（株式会社新潮社 昭和五十四年）
- 星新一『エヌ氏の遊園地』（株式会社新潮社 昭和五十五年）
- 三島由紀夫「愛の渇き」『日本文学名著 三島由紀夫集』（株式会社新潮社 昭和五十一年）
- 三島由紀夫「仮面の告白」『日本文学名著 三島由紀夫集』（株式会社新潮社 昭和五十一年）
- 三島由紀夫「金閣寺」『日本文学名著 三島由紀夫集』（株式会社新潮社 昭和五十一年）
- 三島由紀夫「潮騒」『日本文学名著 三島由紀夫集』（株式会社新潮社 昭和五十一年）

参考文献

- 影山太郎（1993）『文法と語構成』ひつじ書房
- 小林英樹（1998）「「VN をする」構文で使えない動名詞について」『現代日本語研究』5：101-110
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 田野村忠温（1988）「「部屋を掃除する」と「部屋の掃除をする」」『日本語学 11月号 VOL. 7』70-80 明治書院 昭和六十三年
- 平尾得子（1990）「サ変動詞をめぐって」『待兼山論叢 日本学篇』24 大阪大学
- 平尾得子（1996）「VN ガスルと VN スルと VN フスルーサ変動詞語幹の意味と構文的制約一」『日本語類義表現の文法(上)単文編』89-98

宮島達夫 仁田義雄編 くろしお出版

益岡隆志 田窪行則 共著 (1987)『日本語文法セルフ・マ스터シリーズ 3 格助詞』 くろしお出版

森田良行 (1983)『日本語の表現』 7-17 創林社